

## (2) 土壌病害 - 1

### - 1年おきに新病害が発生！立枯病、眼紋病 -

<sup>たちかれびょう</sup>立枯病の発生は、昭和36年稚内市で認められたことがありますが、局部的発生でほとんど問題にはなりませんでした。本病が注目されるようになったのは、昭和54年に網走地方で発生してからであり、数年で広く全道各地に分布するにいたりました。

北見農試では、長期連作ほ場において、数年前から生育不良で、早期に枯死する現象が認められていました。当時、来場されていた宇井教授が、サンプルを診て坪木病虫予察科長に、「これはかの有名な“テークオール”に似ている」とお話しされていましたが、小麦に新参者の私にとっては、何の事やら全く理解できませんでした。坪木科長にこの診断を命じられ、このときから小麦との長いつき合いが始まりました。

黒く腐った根を顕微鏡で観ると、褐色で太く艶のある不気味な菌糸が認められましたが、一方では、地際の黒変した葉鞘<sup>ようしゅう</sup>に形成された小黑粒を砕くと、神秘めいた華奢な細長い胞子が目に入りました。この菌糸や胞子を培養して土壌接種し、「ホロシリコムギ」の種子をまくと、2か月後には苗の根が腐って生育が悪くなり、この根から同じカビが検出されましたので、これらの不気味な菌糸や華麗な胞子が、病原菌であることが解りました。

当時、病原菌名は「オフィオボラス グラミニス」とされ、長い間この名前が有名でした。一方、海外では、昭和47年に新しい名前である「ゴイマノマイセス グラミニス ツリティシ」が提案されていました。この菌の記載と比較しますと、北海道産菌は、完全に一致することから、新しい名前にしたがることにしました。英名は「Take-all」であり、5か月経ってから「テークオール」の意味が理解できました。

<sup>がんもんびょう</sup>眼紋病の発生は、昭和58年美唄市で認められました。深刻な表情をした農家の小父さんとお姉さん5人が、北見農試に診断依頼に訪ねてきました。持参したサンプルを診て、「これはかの有名な“アイススポット”に似ている」と回答しました。20haの「チホクコムギ」が、出穂期までは順調に生育していましたが、その後、倒伏してしまい殆ど屑粒になったと嘆き、落胆

されていました。

被害茎の内部には、灰色で綿状のカビがびっしり潜んでいました。このカビを分離培養しても殆ど生育しませんので、診断が間違っただのではないかと心配になり、偉そうなことを言うべきではなかったと悔やみましたが、ペトリ皿を捨てる事はしませんでした。3週間後の二日酔いの朝、何気なくペトリ皿を見ると、こんもりとした菌そうが目に入り、酔いが醒め、頬がゆるみました。この後からは態度を改め、謙虚な気持ちで接種、同定試験を進めました。

5か月後には、海外で重要病害とされている「アイスポット」であることが解り、秋田県と同時期に、日本での新発生として「眼紋病」と報告しました。現在では、輪作により容易に防除できるようになり、深刻な顔をした農家の小父さんとお姉さん方は、殆ど顔を見せなくなりました。

これらの病害は、典型的な土壌伝染病です。当時は、急激に小麦の作付け面積が増加したことにより、連作畑が多くなりましたので、それまでは輪作畑のなかで、静かに寝ていた華麗で不気味な病原菌が目をさまし、その本性を剥き出しにしたのでしょう。

大地には魔物が潜んでいます。因って古人曰わく「畑作は輪作が基本である」と。

<宮島邦之>



まだら模様立枯病に冒された小麦ほ場



眼紋病に冒された小麦ほ場